

シスコンの男の娘（仮）

アメジスト117

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

篠ノ之家のシスコンの男の娘の話

目次

プロローグ	1
転！☆生！☆	5
僕の人生終わりました	9

プロローグ

いつもお前はそうだった！

僕の考えを決めつけて！

僕を勝手に連れ出して！

無理やりやらせた剣道で負けたからって勝手にライバル視して、勝ったら勝ったでかかってに同情して慰めて、そのせいで何度アイツに叩かれたと思ってる、そのせいで何度義姉との時間を奪った！

お前のせいで僕の大切なものも奪われた！

僕の家族は両親と姉と同一年の姉と僕の五人家族で、その中でも僕は養子赤ん坊のころ神社の境内でああ言い忘れてたけど家は篠ノ之神社をしている。まあともかくその境内の賽銭箱の横にいた赤ん坊の僕を母が見つけて両親で相談して養子にとってくれた

のだ。これを知らされたのは小学校入ったくらいだったかな？そんなに深く考えたり悩んだりしなかったけどね、むしろ喜んだけど！だって大好きな姉が義理で結婚も出来るんだよ！（シスコン？何それおいしいの？）

その話は置いといて小学校入ってそれから下の姉が男子を連れてきたそのせいで僕の大切なものが無くなったんだけど。兎に角そいつがウザいんだ義姉と居ると無理やり何処かにつれてかれて遊びに付き合わされる。此なら千冬さんと剣道したほうがましだった

学校でも読書してたらその本を急に（葉も挟んでないのに）閉じられて話に付き合わされて、弾とか言うやつに親友だとか紹介されたし、後で事情を話して親友じゃないって分かって貰ったけど。

下の義姉が僕も剣道をやってることを言ったせいで勝負させられて今までの憂さ晴らしも含めてぼこぼこにしてやったら勝手にライバル呼ばわりしてきて毎日強引に勝負させられて義姉との時間も無くなった。わざと負けたらアイツも満足すると思っただけならそれはそれで「今回は負けちまったけど次は勝てると思うしさ、また勝負しようぜ」とかなんとか言われて断ったら「悔しがってても始まらないぜ！ほらやるぞ！」って言われて結局やらされた。本当にムカつく

しかもそいつに付き合わされたせいで義姉と製作していたISを一緒に完成させる

という夢を奪われた。それがショックで何日も部屋に引きこもって泣いていたらその間に白騎士事件が起きて、ISの製作者の義姉が雲隠れしたから僕ら家族は政府の重要人物保護プログラムとか言うやつで引越すから両親達が荷造りしてる間に義姉の耳に（勝手に）つけたGPSを使って自分のISと貯めていたお金をもって義姉を追いかけた。

小話

「東お姉ちゃん」

「な、何かなくりよーくん」

「何で僕のこと置いていったんですか！」

「だって私に付いてきたらりよーくんにも迷惑かけちゃうし」

「僕は東お姉ちゃんと居ればそれだけでいいの！東お姉ちゃんも僕のこと思ってくれてたんだらうから一つお願いをきいてくれたら許す」

「本当に！なにすればいいの!?!」

「そっその、これから一緒にね、寝てくた…」

「へ？」

「これから一緒に寝てくれれば許す／＼」

「りょーくん可愛すぎるよ！どうする？今から寝ちやう？！」

転！☆生！☆

突然だが僕、篠ノ之龍（りょう）は転生者だ、今回はその時の話をしよう。

あれ？ここ何処だ？確か学校に行つて、部活から帰つて、疲れたから寝てたんだけどな

まさか！シミュレーション仮説がただしかつたというのか！……うん、ないかな
「すいませーん」

声が聞こえ振り替えると金髪美人が！

え！だれ?!それにしてもきれいだなー

「あ、どうもありがとうございます」

あれ？口に出したかな

「いえ出してませんよ、私は神なので読めるんですよ」

「へー神つてスゴいんだな、それとなんで僕はここに？」

「その事なんですけどまずは私たち神のことからはなしますね。私たち神は存在すること

とができなくなった世界を消したり、それを補うための新しい世界を創っているのですが、なにぶん同じ事の繰り返しなので退屈するんです。そこでランダムに選ばれた生命の眠っている時などに許可をもらって特典付で違う世界に行ってもらおう事をしてたんですが、今回手違いで貴女の許可を取らずにここに連れてきてしまい、戻すことも出来ないのです。通常与えられる特典は3つなのですが、特例で特典を二倍の6つまでとしました。それと転生する世界はくじで決めさせてもらいます」

「りよ、了解です」

多分僕は直ぐに許可するから特典が二倍がになつてとおもえばいいか

「では、特典を6つ決めて下さい」

特典かー何にしようか……

： よっし決めた!

「じゃあまず1つ目が並列思考で

2つ目が全ての才能

3つ目が全ての仮面ライダーの製作ができる知識

4つ目が全てのモンスターになれる体

5つ目が全てにデメリットなく適合できる体

6つ目が僕を亜人にして下さい」

これはチートですね決めたことだ気にするな

「分かりました、その6つですね。では次に転生先を決めます、この箱の中に紙があるのでそれを一枚出してください」

僕が引いた紙には「IS、インフィニット・ストラトス」と書いてあった

ヤバい知らねー、ま！何とかなるでしょ

「インフィニット・ストラトスですね今から転生させますので目を瞑っていて下さい」
そう言われて目を瞑っていたら段々意識がなくなつて完全に途切れた

小話

「おーいアテナ転生させ終わったかの？」

「はい、たつた今終わらせましたよそれにしても彼女良かったですね女性の優位な世界に行けて」

「？お主何を言つとるんじや、彼は男じやぞ」

「へ？ホントですか？」

「嘘いっても意味ないじやろ」

「私、神なのにずっと女性だと思ってました」

「まさか性転換とかしてないよね」

「そのままの性別でおくるようにしたので大丈夫です

タブン」

「多分か…」

「あ!かわいい顔になるようにしちゃいました」

「元々かわいい顔だったからいいんじゃない」

僕の人生終わりました

僕が四歳なった位から変な夢を見るようになった。真つ白な部屋で綺麗な（お姉ちゃん程ではないが）人？が僕を転生させると言っている夢だ。

五歳位から前世のような映像を少しずつ見るようになり小学校に入る前には全てを思い出した

小学校一年生になり最近では剣道で千冬さんにたいして一本は取れるようになってきたし、父とは対等に戦えるようになり箒にはまだ負けてない。

今まで入ることの許されなかったお姉ちゃんの研究室も入室の許可をもらって今お姉ちゃんと一緒にI Sの製作をしている

絶対防御のシステムはこれでいいかな

「お姉ちゃん絶対防御のシステムの確認をおねがい」

「はい今行くよ」

一応お姉ちゃんに確認をしてもらわないと危ないし、実際に物質の粒子変換の時に変換させたコップが戻らないことがあったし。

「よしよしりゅー君東お姉ちゃんに見してみなさい。フムフム、うん♪完璧だね！」

「良かった、お姉ちゃん次は何すればいい？」

「そうだなー、テスト稼働もしてみたいしちーちゃんをよんできて、多分道場の方で剣道をやつてると思うから」

「分かった呼んでくるね♪」

椅子から飛び降りるとお姉ちゃんの研究室から出て道場に向かう

お姉ちゃんがいつていたちーちゃんの本名は織斑千冬さんお姉ちゃんの親友でお姉ちゃんと同じで普通の人間とは言わない。剣道が中3なのにめちやくちや強い後お姉ちゃんにアイアンクロー喰らわせれるとかどんな身体能力だよまったく、それに普通にいい人だ多少脳筋な所もあるけど」

「ほう、私のことをそんな風に思ってくれていたか」

頭を掴んだ手で無理やり後ろを振り向かされた

ヤバイです千冬さん貴女の後ろに修羅が見えます！

「ち、千冬さん！道場に居たんじや」

「少し！休憩がてらに！外に行つていてな！戻ってきた時に！お前の声が！聞こえたの
でな！」

止めてー！語尾言う度に掴んでる力強めないで！

痛い！割れる！割れる！

「お前には東を抑えるのに協力してもらおう時もあるからな、このくらいにしてやる」
「いっつー！痛すぎるでしょ！この鬼！千冬！悪魔！」

ヤベツ、声に出てたけど気付いてなさそうだ良かったー

「それで、私に何か用か？」

「あつはい、千冬さんにI Sのテスト稼働をしてもらいたくて呼びに来ました」

「分かった。場所は東の研究室だろう？先にいつて待っている。お前は少し休んでから来るといいまた徹夜でもしたんだろう」

ば、ばれてーらー。前に徹夜して倒れたから千冬さんなりの心配だろうな
あれ立ち止まって此方振り向いた、なんだろ

「それと、私の名前は罵倒にならないからな」

聞こえてたのね、終わったー僕の人生。亜人だから死なないけど